

企業から見たインターンシップ

日立製作所

2016年卒業予定者の就職活動スケジュール変更にもない、ウインターインターンシップを実施する企業が増えている。例年、サマーインターンシップで100コースを超えるインターンシッププログラムを実施している日立製作所もこの冬はじめてウインターインターンシップを実施する。日立製作所、本社で採用・インターンシップを統括している大竹由希子部長代理にウインターインターンシップを実施する意図とプログラムを通じて学生に感じてほしいことなどを聞いた。

多彩なコースで実務体験ができる
日立のインターンシップ

この冬、日立グループが実施を予定しているウインターインターンシップはサマーインターンシップ同様、多彩なコースで実務体験ができる内容となっている。研究、設計、システムエンジニアといった技術系職種を対象とし、参加者は選択したテーマごとに各部門に配属され、課



仕事内容だけでなく、 会社風土や社員の人柄を知る 貴重な機会

のレクチャーを受け、現場社員の指導の下、1〜4週間にわたり課題に取り組み。指導担当の社員も真剣で、参加者をお客様扱いではなく、若手社員に接するのと同様にシビアに指導する。そして最終日にはプレゼンテーションを行い、フィードバックを受けるのが一連の流れだ。

**本当の意味での「仕事」を理解する
貴重な機会**

「もっと多くの学生に、仕事」に対する理解を深めてほしいとの想いから、日立はウインターインターンシップの実施を決めました。サマーインターンシップを実施していても、スケジュールの都合で参加できない学生もいますし、受け入れ人数にも限界があります。そこで、もっと多くの学生に仕事体験の機会を提供するために、就職活動が始まる前のタイミングでウインターインターンシップを実施することにしました」（大竹氏、以下同）
就職活動スケジュールが変更となる2016年卒の就職活動。開始時期が遅くなる分、それまでの時間を有意義にしたい。とはいえ、インターンシップと一口に言っても、短期間で座学と職場見学といったプログラム内容のものから、実際の職場に配属されて社員の指導のもと実務に取り組みものまで、その内容は

題に取り組み。世界トップクラスの技術水準を有する本社での業務体験を通じて、仕事の面白さや厳しさを体感できるインターンシップとなっている。

参加初日はまずオリエンテーションで日立の事業内容や関連部署との連携などについて説明を受ける。その後は各部門に配属されて、そこでの仕事の流れなど

様々だ。

日立のインターンシップは1〜4週間にわたって実際の仕事現場で実務体験を積める形式となっているが、大竹氏は、「現場で社員とともに業務に取り組むプログラムを通じて、本当の意味での、仕事を体験してほしい」と企画意図を語る。それゆえ、日立のインターンシップは参加者が取り組む課題テーマも非常にリアルなものが多く、同社がビジネス現場で今まさに向き合っているテーマも少なくない。過去に出題された課題のテーマを見てみると「自動車の予防安全向け画像認識アルゴリズムの開発」「多言語音声語理解技術の研究」「空調機器などの送風機開発」「クラウドサービスと連携する分散ファイルストレージの研究」など機械、電気、情報処理といった領域で実践的な内容が並んでいる。これら課題に対する

アプローチの仕方から検討しなければいけないこともあり、まさにビジネスとしての研究や開発の体験ができるのだ。

会社の風土や人柄を感じられるのは大きな収穫

実際の職場でリアルな課題に取り組むことで、仕事内容に対する理解が格段に進むことは言うまでもないが、その他にも得られるものは多いと大竹氏は話す。「業務内容についての理解が深まるだけでなく、その醍醐味や厳しさも感じられるはず。文字や言葉ではなかなか伝わらない、そういった部分を肌で感じてほしいと考えています。その他にも、過去のインターンシップに参加した学生の感想では、『会社の風土や人柄を知ることができたのは大きかった』という声が多く聞かれます。インターンシップを通じて

て、『自身の価値観と会社の風土は本当にマッチするの？』、『そもそも自分が大切にしている価値観はこれでいいのか』といった仕事や会社選びの軸を見極めてほしいですね」

「休憩時間に和気あいあいと社員同士が会話をするのを見てイメージが大きく変わった」という参加者の声もあったという、素の社員を間近で感じられるのも実践型のインターンシップの大きなメリットといえるだろう。現場社員との交流を通じて、社員の人となりや風土も感じてみてはいかがだろうか。

大学での研究を深掘りし、インターンシップをより有意義に

出題される課題テーマの専門性が高い日立のインターンシップだが、どんな準備をしてプログラムに臨めばいいのか、大竹氏は学生に次のようなアドバイスを送る。

「当社のインターンシップは、研究領域との関連性で課題テーマを選ぶ方が多いので、まずは自分の取り組んでいる研究をしっかりと掘り下げてきてほしいですね。その過程で解決できなかった事や疑問に思ったことを明確にし、課題に取り組むことで得られるものは多いはず。それでも、学生の皆さんが実践的な課題を解決

することは簡単ではないでしょう。参加者はみな四苦八苦しながら課題に取り組んでいますが、苦労した分、解決できた際には成長を実感できるはずですよ」

同じ、研究、といっても大学と企業では異なる点も少なくない。ビジネスとの距離が近い研究や設計に取り組むことで、ビジネス観点での仕事とはどういうことなのかを感じられると同時に、自分の研究がビジネスにつながるという手ごたえも得られるだろう。

学業が忙しく、参加をためらっている理系学生がいるかもしれないが、インターンシップは視野を広げる貴重な機会、就職だけでなく、大学で学ぶ姿勢についても大きな刺激となるはず。将来を考えるのであれば、就職活動が本格的に始まる前にこの機会をぜひ活用してほしい。

理系学生へのメッセージ



日立というと機械や電気系のイメージが強いかもしれませんが、近年では事業の多様化が進んでいて、農業×ITといったテーマもあります。情報通信や農学、化学、生命などの知見が活きる仕事もあるので、これらの学部学科の人もぜひ興味を持ってほしいと考えています。企業に入り込んで、仕事に取り組むことができるインターンシップを活用し、将来を考えるきっかけとしてください。仕事や会社に対する先入観やイメージがいい意味で裏切られますよ。

株式会社日立製作所
人事教育総務センタ 採用グループ 部長代理
大竹 由希子



夏のインターンシップで実施された横浜研究所の先輩社員との懇談会風景